

審査の結果の要旨

氏名 竹内皓

本論文は17世紀、18世紀フィンランドの木造教会建築に関する研究である。特にフィンランド・ボスニア湾地域に生まれた、箱柱式教会の構法についての特質、推移、その誕生に関する技術的背景、更に、この国の木造建築史での位置付けを明らかにするものである。

北欧の国々の木造建築について、先行研究は非常に少ない。従って、この時代の木造建築について、歴史について、新たなページを開くものと考えてよいだろう。

先行研究の少ない中、申請者は基礎的資料を十分に収集し、その上、時間をかけて現地の調査を踏まえ、自らの作図等により、本構法を明らかにしようと試みたもので、評価に値するものである。

序論では研究の目的が明確にされた上で、まず、フィンランドのたどった歴史、北欧でのキリスト教の流れが紹介され、本構法の生まれる環境を明らかにしている。その上で、既往の研究が紹介される。このような書き方は一般の論文とスタイルを異にしているが、特殊な国の、特殊な構法だけに、まずその周辺について、あらかじめ紹介をしたものと評価しよう。また序論の最後に、既往の研究と、申請者の研究のスタンスと方法が述べられている。即ち、現地調査によって本構法を明らかにしようとする意図が示されており、評価される場所である。我が国において、この種の先行研究は見当たらない。

第1章は本構法の特質を著わしている。ここでは、当時のそれ以外の構法がどうであったかについて紹介され、本構法の違い、利点を際立たせている。特質についてはいくつかの実例を並べ、部位ごとにその特徴を紹介し、総合的に本構法を説いている。収集した基本データの上に、現地調査により独自の製作した作図などを加え、丁寧な構法の説明は評価に値するところである。

第2章は十字形の推移について述べられている。ここでは、前段、スウェーデンでの新しい様式がフィンランドへも伝えられた歴史が述べられる。伝えられた十字形教会へ、本構法が次第に応用され推移していく過程を、実例に基づいて丁寧に説明されている。ここでも、調査結果が論の重要な部分を構成しており好感が持てる。

第3章は本構法がどのような背景の中で誕生したかが紹介されている。本構法を二つに分解し、躯体はフィンランドの伝統的手法の中から、屋根架構はスウェーデンの石造教会

を手本にして、つまり、二つの文化が一体となって生まれたとする申請者の論理は興味ある。北欧の建築文化が、このようにして生まれたという一つの例が示されており、興味ある提言と判断した。

第4章は本構法の歴史的な位置づけである。

本構法の技術は、やがて十字形教会へと利用され、応用され、十字形教会が発展したことが述べられる。この時代の後半には、大規模な十字形教会の実例があげられ、本構法がフィンランドの建築史に大きく寄与したことが述べられる。本構法は北欧の他の国には存在しなかったとするところに、この構法の特殊性があろう。この構法に着目した、申請者の並々ならぬフィンランド木造建築への愛着を感じさせられる。

既往の研究の一つの文献に基づいて、北欧三国との比較が論じられるが、スウェーデン、ノルウェーの内容にもう一步の突っ込みが不足しているが、本論文の目的からしてやむ負えない所と判断した。

本論文は先行研究の非常に少ない中、申請者による現地調査によって、それらのデータによって、構法の歴史を解き明かしてゆこうとするものである。そこに独創性があり、意義があるものと判断した。

以上、新しい知見が多く見られ、貴重な論文であることを評価したい。

尚、本論文に関連する既発表論文との関連が記載されていないので、追記するよう指示をした。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。